

巻頭言

第7回日本中医学会学術総会は台風直撃のなか開催された。篠原昭二会頭はじめ準備委員は大いに気を揉んだが、予想以上の参加者で盛会であった。総合テーマは「日本における中医学の受容と役割」である。

日本中医学会総会がお江戸を離れ、初めて地方で開催されたのが今回の熊本総会である。熊本弁の「わさもん」漢字では「早生者」新し物好き、初めてが大好きという意味で、熊本を代表する県民性といわれている。

日本初のスクランブル交差点は1968年12月1日、熊本市の子飼交差点が発祥である。県警の担当者がニューヨーク5番街のスクランブル交差点からヒントを得た。

日本初の藩立医学校も熊本である。村井見朴が藩主細川重賢の命を受け、宝暦6年(1756)に開校した。山崎正董著『肥後医育史』に教育内容の詳細が記されている。素問靈樞・脈経・諸病源候論・難経・傷寒金匱・甲乙経・類経・千金方・肘后方・外台秘要・本草綱目が主なテキストとして講義に用いられた。藩立の薬草園も同時に作られ、本草学を重視した。明治初期、温知社と共に漢方存続運動の一翼を担った熊本の春雨社は医学校の流れをくむものである。

熊本の中医学を興した牟田光一郎先生も全国に先駆けて中医学を受容した「わさもん」の1人である。日中国交回復直後より、ほぼ独力で中医書を読み解き、『校釈諸病源候論』を出版した。ライフワークである『景岳全書』の邦訳も完結している。私は幸いにも平馬直樹会長の紹介で、研修医時代より牟田先生の手で中医学を学ぶことができた。有り難いことに弟子である私に対し、牟田先生は一切学問的束縛なくお付き合いいただいている。

熊本が育ててきた土壌から、加島雅之先生という大樹が育った。熊本赤十字病院で最先端の診療を行いながら、今回のシンポジウム「中医と漢方、対話と展開」では「中医と漢方の背景にあるもの」と題して、時代と東西を超えた講演をしていただいた。

学問に国境はない、学者には祖国がある。

日本人の学者がノーベル賞をもらったら嬉しいことである。しかし医学理論や学説は、より道理にかなっているか、実際の運用に有益であるかが肝要であって、どこの国の誰の弟子の説であるかは評価の対象外であるはずである。グローバルスタンダードの利権争いで学問がないがしろになってはいけない。師匠の説に限界があれば、乗り越えるのが弟子の役割である。中医学と日本漢方という国境も、乗り越えるべきボーダーである。日本中医学会こそが世界に先駆けて、古今東西の垣根を乗り越えることができる「わさもん」である。

梶原町立梶原病院 内科 (元日本東洋医学会熊本県部会会長)

吉富 誠